
春花物語

あゆみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春花物語

【Nコード】

N5019R

【作者名】

あゆみ

【あらすじ】

一人の青年と、春の花たちのお話。

さくら（前書き）

連載ですが、一応一話完結型になっています。

読まなくても不都合はありませんが、第一話は以前投稿した『桜』と微妙に繋がっています。

さくら

ああ、この騒ぎは一体いつになったら収まるのだろう。

家の近所の、花見客で賑わう広い公園。なんとなくフェンス越しに眺めていた。花は見事に咲き誇り、それは美しく咲いていた。そう、花だけは実に見事に咲いているのだ。華やかに、軽やかに、桜特有の儚さを伴って。時折そよぐ風に花びらを散らす様など、まるで夢のように幻想的だ。なのに、どうして、この有様か。

花見とは名ばかりのどんちゃん騒ぎ。本当に桜を見ている人なんて、一人だつていやしない。酔って叫び声を上げる者、酔いつぶれていびきを掻く者、ひたすらに食事を続ける者。そのありようは様々だが、実に不愉快極まりない。

ここも、以前は静かで穏やかでとても良い穴場だったのだ。しかし、何かの雑誌で絶好の穴場だの何だのと取り上げられたらしく、すっかりと姿を変えてしまった。

有名になれば、知る人が増えれば、そこはもう穴場とは呼べない。『絶好の穴場』を減らしてどうする。余計な事ばかりしないではない。

「……ん？」

思いながら、公園を通り過ぎようとした時だ。

ただ一人、桜を見つめる人を見つけた。

桜の木の合間から、不自然に覗く長い黒髪。桜の枝に座り、うつとりと幹に身をゆだねている一人の女性。酒を口に含み、時折そつと、桜の花に手を伸ばす。白く細い指先は、一瞬見惚れてしまいそうなほど美しく、蝶のように優雅だった。

桜色の着物の裾を乱し、片膝を立てて酒と桜を楽しむその様は、花見の本来あるべき姿のようにも思える。

ただ通り過ぎるだけだったはずの公園の中に、知らず、僕は足を向けていた。なんだか、その女性から目を離せなくなったのだ。なんだか少しでも目を離したら霞のように消えてしまいそうな気がして、けれど、声を掛けることもできなくて。怖くて、僕は桜の木の下で立ち尽くした。

「なあ」

一瞬、桜が歌ったのかと思った。

「なあ、見えているなら返事くらいしておくれな」

「……え？」

目を見開き、僕は思わず息を呑む。その様子に、桜の人は楽しげにくすくすと笑いだした。

「……そうか、お前には見えているんだね」

呟くと、彼女はすくと立ちあがり、ふわりと地面に降り立った。そして、盛大に笑った。

「お前には見えるか！ ははっ、愉快、愉快！ まだ私を見る人間が居たとは、長生きはするもんだねまったく！」

桜の木の上で、彼女は笑う。本当に、心底楽しそうに、腹を抱えて彼女は笑った。

「はははっ。嗚呼、実に愉快だ！ 気に入ったよ！」

この人は、一体……？

思わず、一歩後ずさる。桜色の着物が舞う花びらと同化するように揺れていた。

「なあ、お前、今幾つだい？」

「え？」

「年齢だよ、年齢」

唐突に問われたその質問に、僕は小さく「十九」とだけ答えた。その返答に彼女は満足そうにひとつ頷き、にい、と白い歯を見せる。いたずらを思いついた子どものようなその笑い方は、深く根を下ろす幹の力強さにも似ていて、けれど儚く舞う花びらは幻のように密やかで、何だか囚われてしまいそうになる。夢か現か、分から

なくなる。

けれど彼女は、僕の頬に確かに触れた。確かな感触を伴って、愛おしそうにそっと頬を撫でる。

「……十九か。一世紀も前だったらもう飲める年なんだけどねえ」
どこか懐かしそうに、藍色の目を細めて呟いた。

「私はさくら。……この地の守人として『桜守』と呼ばれていた事もあったけどね」

あなたは少し、私の想い人に似ているよ。囁くように紡がれる言葉に哀愁を滲ませ、けれど努めて明るく彼女は笑った。

「来年、またここに来な。旨い酒飲ましてやるよ！」

楽しげに言って、さくらは消えた。まるで、全てが幻であったかのように。

『私はさくら』

……さくら。

桜？

『旨い酒飲ましてやるよ！』

僕はふと、周囲を見回した。

花見とは名ばかりのどんちゃん騒ぎ。本当に桜を見ている人なんて一人だっतीयやしない。

そうか、と僕は少しだけ笑った。

つまりこのどんちゃん騒ぎは……。

さくらの笑顔を思い浮かべ、僕はもう一度笑った。

つまりはアイツの差し金か。

了

つばき

家の近所の、まだ雪の残る小さな庭。そこに、椿が紅く咲いていた。眺めていると、ころりとひとつ、椿の花が地面に落ちた。

椿の花はどこか気味が悪い。

首からころりと落ちるその様は、さながら首を切られた罪人のようだと僕は思う。

確かに、華やかに花びらを広げるその姿はとても美しい。けれどあの毒々しいまでに真っ赤な花びらは、まるで返り血を浴びたようにも見えてしまう。椿の赤は、鮮やかすぎるのだ。まさか死体が埋まっているのではなどとは思わないけれど（桜の花じゃあるまいし！）、それでもその落ちる瞬間だけは見たくない。生命がぷつりと途絶える一瞬を見るようで、なんだか縁起が悪い。

「……不吉、な感じだよな」

思わず、僕は呟いた。

椿の花は、酷く空虚な感じがする。

あの凜とした佇まいの奥で一人孤独を嘆いているようで、自ら命を絶とうとしている少女のようで、随分と物悲しい。儚さ、孤独さ、ある種の不気味さを気高く隠し通そうとしているようにも見えて、僕はその美しさに眉をひそめた。

「そうかしら。あたしは一枚一枚花びらを散らしていく花の方が不吉だと思うのだけど」

不意に後ろから聞こえた声に、僕は驚いて振り返った。

「……貴方は？」

そこにいたのは、椿のような紅の着物を着たひとりの女性。僕の手元には答えず、その人はただ静かに微笑んで見せる。

年の頃は二十一、三歳くらい、だろうか。綺麗な黒髪をきつちりと結いあげ、小さなかんざしを刺している。切れ長の瞳は冴え冴えと光り、けれど紅を引いた唇は柔らかく弧を描いている。まるで、

時代劇に出てくる貴族のようだと思った。しかも公家ではなく、武家の。

誇り高く、気高く、嫌味にも思えるくらいの気品を滲ませて、その人はそつと佇んでいた。

「こんにちは」

彼女はにつこりと笑って見せた。

「椿って、他の花みたいに未練がましく張り付いているよりも潔いと思わない？」

僕に意見を求めるように首を傾げる。

いや、おそらく『意見』ではなく『同意』を求めているのだろう。自信たっぷりで、そしてどこか高飛車な物言いに少々腹は立ったが、その意見自体には頷ける。落ちて、死してもなお美しい落ち椿。その様は戦火に身を投じる武士のように潔く、刃の切っ先のように美しく、同時に喪に服す貞淑な妻のように清らかだった。

「……確かに、そう考えることも出来ると思います。だけど、椿の散り方はどうしても『死』を連想させます」

「『生』と『死』は隣り合っているものよ。別にいいじゃない」

この世に生を受けたということは、この世で死に至るということ。そうでしょう？ と彼女は続け、微笑んだ。

「それに、あたしだったら一枚ずつ花びらを落としていくなんて未練がましい生き方はしたくない。……無様な死に方は決してしたくはないもの。美しい生き様、潔い死に様。それはむしろ清々しいわ」
風が吹いて、リン……とかんざしが鳴った。小さな赤い花をあしらったそれは、艶やかな黒髪に良く生えていた。

「あたしなら、醜い死は選ばない」

そう言い切って、スツと歩を進める。

「あたしは、つばき」

通りすがりに呟いて、そのまま角を曲がっていった。追いかけたけれど、その人は霞のように姿を消していた。

ばさり。

後ろで、椿の落ちる音がした。

つつじ

近所の庭で、白いツツジが花を咲かせていた。

愛らしく、けれどどこか大人びたその花に、気が付けば僕は口元をほころばせていた。周囲に誰が居る訳でもないのだけれど、なんとなく恥ずかしい気分になって口元を押さえた。そしてひとつ、わざとらしく咳払いをして見せる。

少しだけ、その花びらに触れてみた。

「……白いだけじゃないんだ」

ほんのりと、薄く淡く色付いている事に気がついた。まるでそれは、寒さに染められた、頬の色。綺麗な色だと、呟いた。

「あまり触れないで」

くすくすと、後ろから小さな笑い声。

そのささやかな声に振り返れば、そこにはツツジのように愛らしく頬を染めた少女が居た。くるりと大きな目をした、十にも満たないような小柄な少女。

おかつぱ頭で、少し古風な顔立ちの女の子。白いシャツにリボンタイ、ベストに短パン。それに黒の皮靴。まるで親戚の結婚式にでも行く男の子のようだ。けれどその恰好があんまりしっくりと似合っているものだから、なんだか笑いそうになってしまった。

「あんまり触ったら、くすぐったくなっちゃう」

楽しげに、少女はそう言った。

「……君は？」

僕の問いには答えず、少女はふふ、と楽しげに笑って見せた。

「近所の姉さまから、貴方のお話を聞いたの」

少女は、一体誰の事を言っているのだろうか。心当たりがなく、僕は首を傾げた。少女は近くの公園の方をちらと眺め、からかうように僕を見た。

「僕の、話を？」

「ええ、優しい方だと聞いたわ。優しくて、しかも愛らしい方だと言っていた」

そう言って手招きをするから、僕は少女の目線の高さに合わせて体をかがめた。そしてどうしたのと声を掛ける。少女はひそひそ話をするように僕に顔を近づけてきたと思ったら、愛おしそうに微笑んで僕の頬にそっと口付けてきた。

とても自然な動作だった。

あまりにも自然な動きだったから、避けることが出来なかった。

「優しくて、愛らしくて、私たちを見つけてくれる方」

そのほほ笑みは、まるで初めて恋をした少女のように純粹で、清らかだった。少し背伸びして僕の頬に唇をあてた少女は、まるで、そう、あの薄く色付いたツツジのように頬を染めていた。

「……君は、ツツジ？」

少女は笑って頷いた。

「私は、つつじ」

少女は姿を消した。

椿や桜と同じように、霞のように。

全く、こういうことだろう。これは、この花たちとの出会いは一切何だったのだろう。夢か、現か、幻か。けれどあの簪の音は、頬を撫でた指先は、頬に触れた唇は、確かに、そこにあったのだ。いや、確かに『あった』のだと思いたい。

彼女たちが何者なのか、何のために僕の前に現れたのか、何ひとつ分かる事などないのだけれど、それでも夢ではないと、幻ではないと信じていたい。夢か現か分かる者など居ないのだ。だったら、信じている方が絶対に楽しいはずだ。

僕は空を見つめ、少しだけ、微笑んでみた。

この空が幻ではないように、この風が夢ではないように、花との出会いもきつと現実。しばしの間は信じていよう、と僕は笑った。

何せ、ひとつ約束を貰ったからね。

嗚呼、来年の春が楽しみだ。

了

つつじ（後書き）

これで春花物語はおしまいです。
お付き合いありがとうございました。

でも気が向いたら他の花の話も書くかもしれません。
その時は番外編として、またよろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5019r/>

春花物語

2011年3月15日21時55分発行